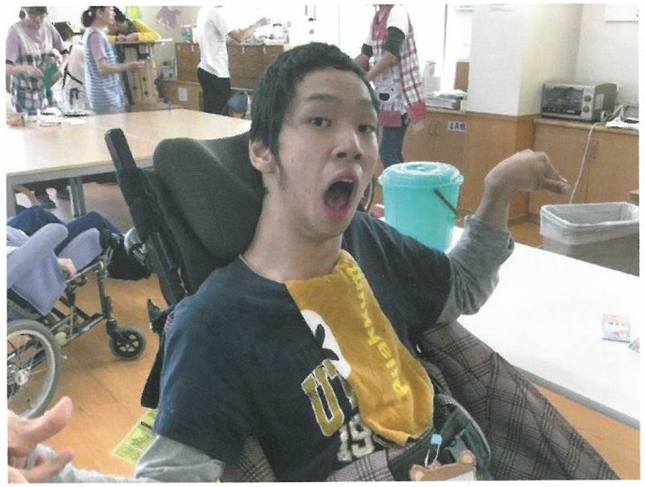
北海道・旭川●あかしあ労働福祉センターの実践

北の大地の仲間たち ―2019―



今月の主人公　翔さん

第4回 「働く」を支える給食提供

あかしあ労働福祉センター第2作業所
主任調理員　川合真知子

「ナンデヨ!!」

給食の時間になったとたん、「ナンデヨ!!」と、びっくりした大声がデイルームに響きわたりました。

声の主は大泉翔さん（仮名・現在21歳）。

痙直（けいちょくがた）型の四肢麻痺（アテトーゼ混合型）のある翔さんは、地元の特別支援学校高等部を卒業後、週二日のペースで通所しています。

翔さんは「いろいろな人と関わって楽しく過ごしたい」という理由から、多くの事業所を利用しています。とても社交的な性格で、いろいろなことに関心をもち、周囲の人の表情や口調で、相手の気持ちまで汲みとってしまい、自分の気持ちを押し殺してしまうほどのやさしい性格の持ち主です。

彼は五十音の文字盤を使うことで、自分の気持ちを表現することはできますが、障害の特性から発語での自己表現は困難。それでも翔さんはあきらめることなく、短い言葉や身体を力いっぱい動かし、自分の気持ちを伝えようとする努力家です。

ひとりの食事提供形態を巡って

翔さんはすべての場面で全介助を要する重度の肢体障害がありますが、卒業時の引継ぎ時点では、家庭での生活を含め、サラダ類を茹（ゆ）でて柔らかくしたり、ご飯をおかゆに変えるなどの軟食ではなく、みんなと同じ常食（一般食）ということでした。

そのため、卒業後の日中活動の場においても、食事の提供方法は常食を提供していますが、繊維質の多いサラダ類やピラフなどのパサつく料理、スルスルと入りやすい麺類などはむせてしまうときもあるので、料理に合ったソースや出汁などに「とろみ剤」を混ぜ、とろみをつけて飲み込みやすくなるよう対応してきました。

ところが、通所を始めてしばらく経った頃、翔さんが利用するいくつかの事業所の情報によると、「むせると誤嚥性肺炎につながる可能性がゼロではないので、軟食

（温野菜）を提供している」という事業所が大半だったのです。

すると、担当職員から調理員に対し、翔さんの給食提供の形態について相談がありました。

わたしたち調理員としては、日頃から彼の食事の状況を見ている立場から、「どうして軟食なのか。確かにむせることは増えてきたけれど、誤嚥はないし、今までも大きな問題はない。ほかの事業所が実施しているからといって、自分たちが同じようにする必要はないのではないか。まずは翔さん自身に訊いて判断してはどうか」と提案しました。

わたしたちは、これまでの翔さんの食事の経過や現在の様子、看護師が常勤していることなどを考えると「食事提供形態に関しては、翔さん本人に選択させるべき」という一定の結論を出したのです。

自分のことは自分が決める

いよいよその日がやってきました。給食の時間になり、翔さんが選択しやすいように、常食と軟食の二種類を用意し、「むせこみからの誤嚥が心配なので、今日からこっちの軟食でどうですか？」と翔さんに聞くと「ナンデヨ!!」と、彼は力いっぱい大きな声で拒否してきたのです。

普通の食事を食べることで、むせて誤嚥性肺炎につながるリスクを翔さんにわかりやすく説明しても「ナンデヨ!!　ナンデヨ!!」と何度もくり返し、車椅子が大きく揺れるほど首を大きく横に振り、彼は軟食を拒否するのです。

その姿はまるで、（自分はみんなと同じ給食が食べたいんだ！自分のことは自分が決める！）と訴えているようでした。

軟食にしてしまうと、どうしても風味が変わってしまう場合がありますが、食材を柔らかく茹でることで飲み込みやすく、むせることは減り、誤嚥性肺炎のリスクも減少します。しかし、何度もわかりやすく説明と説得をしても、彼が「軟食」に対し、首を縦に振ることはありませんでした。

ただし、担当職員が心配するように、むせこみによる誤嚥の可能性がゼロではないので、①食事摂取時の姿勢や食べ物を噛むことを意識すること、②必要に応じては、今までのようにとろみ剤を使用すること、③口に食べ物を入れているときは食べることに集中すること。そして、④なによりも体調が悪いときなどは看護師などの判断で一時的に軟食にすること、を翔さん本人にも了承してもらい、今後も常食を提供することにしました。

そのときの翔さんは、とりあえず自分の意見（思い）を受け入れてもらえたことに、まずはホッとした様子でした。

支援者にしてみれば、翔さんのことを考え、安全を優先させた「軟食」（温野菜）の相談でしたが、このことがきっかけで、安全性はもちろん大切だけれど、同時に利用者の状況について職種を超えた職員集団として確認しながら、利用者本人に選択してもらう